

移民、友人Sのこと（下）



友人Sの長男がピアノを弾いている。彼は帰り間際私のためにバイオリンを聴かせてくれた。

Sはブルネイの大学に在職中、奨学金研究員制度を利用して二年間トロントの大学にいたことがあり、そのときカナダ政府の移民政策が実際どのようなものかを見ている。移つてすぐのメールにトロントはこれまでいたところで一番平等で自由なところだ、とあった。

トロントの人口は五百万人を超えている。そのうち半分がヨーロッパ、中南米、アジアなどからの移民である。Sと同じ中国人は全人口の一割、五十万人余が住んでいる。英語の教師をしている奥さんから、彼女の働いている大学には九十カ国以上の若者が学んでいると聞いた。トロントの救急電話（九一一）は百五十カ国以上の言語で二十四時間いつでも対応している。

なぜブルネイからトロントに移住したのか私は訊ねる。

「一番大きな理由は子供達の教育、ブルネイは小さな国なのであそこでは子供の才能を伸ばすための教育を期待できない、それにムスリムの国なので」

Sと奥さんが話してくれる。仏教徒の奥さんは生活の隅々まで入り込んでいるイスラム教に最後まで違和感があったようだ。

海外に住む中国人の間では相互に助け合う組織があると聞いていたので、Sにそのことを訊ねる。

「ここにいる人たちはみんな忙しい、毎日毎日自分の仕事で手一杯である。お前の問題はお前一人で解決しろと言う。ここは大都会だ、誰もが自分のことで精一杯である。日本でもそうだろう、日本人であるからと言って東京で誰か助けてくれるか」

Sは五十歳を過ぎてから見知らぬ土地に移ることは本当にハードなことだという。道路が分からない、病院の場所も、いろんなことが全部はじめからやり直しである。近所つきあい（家の前の除雪をするとか、まわりをきれいにしておくとかいろいろ）もあり、それがけっこう厳しいらしい。

Sは大学の教養課程で物理を教えているが正式の教授でないので、休めば収入なしの時間給である。朝早く出て午前の授業を終え、午後は家で休憩、そして夕方再び出て行く。帰宅は遅い。その繰り返しである。

最初奥さんと子どもだけトロントに移り、Sは一人ブルネイに残り働いていたらしいが、「三ヶ月しか続かなかった、家族と離れ暮らすのはとても無理なのを知った」とS

が話してくれる。

朝から晩まででんてこ舞いで、経済的にはブルネイの方が楽だったが、今が一番ハッピーだという。みんな一緒にいるから。

奥さんに今の日本のことを問われて、あまりいい世の中でない、いじめやワーキングプアや殺人やひどいものですと話すと、逃げ出せばいいのに、どうしてどこかに行かないのといぶかしげであった。日本ではどこか外国に移ることで問題を解決する考え方はほとんどないようですと答えたが、多分納得してもらえなかったのではないか。

暮らしやすいところに住む、そのために生まれた国から移動する、それが移民とよばれる人々の基本にあるのだろう。

帰国の前夜、Sは「十分もてなせなくて悪かった、今度来る時はそうでないようにするからまた来てくれ」と。それは心からの言葉であった。そのことがよく分かった。

翌朝早く、奥さんや子供が寝ているうちに家を出た。Sの通勤の車に便乗し地下鉄の駅で降ろしてもらった。空港までの電車を間違えるなど何度も言われた。

(二〇〇七年十一月二八日)